Contes Fantastiques Français du 19e Siècle:
Jean Lorrain et d'autres.

紀田順一郎 荒俣宏 責任編集

世界幻想文学大系 32 B

な物語 下 中西敏一 訳

Story: Edward Bulwer-Lytton

国書刊行

世界幻想文学大系……責任編集＝紀田順一郎＋荒俣宏
第三十二巻B

不思議な物語——下

昭和六〇年二月二五日印刷　昭和六〇年二月二八日初版第一刷発行
著者——E・ブルワ＝リットン
訳者——中西敏一
発行者——佐藤今朝夫
発行所——株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三—五—一八　郵便番号一七〇　電話〇三—九一七—八二八七　振替東京五—六五二〇九
造本者——杉浦康平＋鈴木一誌　協力＝佐藤篤司
挿画——渡辺冨士雄
印刷所——凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社
製本所——凸版印刷株式会社
定価——三、二〇〇円
●—落丁本・乱丁本はおとりかえします

中西敏一なかにしとしかず
一九二九年、三重県生れ。
東京文理科大学英語英文学科卒。
現在、東洋英和女学院短期大学教授。
専攻、英文学。
主要著訳書——
『チャールズ・ディケンズの英国』開文社、一九七六年。
W・コリンズ『白衣の女I・II・III』国書刊行会、一九七八年。
J・フォースター『チャールズ・ディケンズ伝』(共訳)研友社、近刊。

世界幻想文学大系——第三十二巻B

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

不思議な物語——下

E・ブルワ＝リットン——中西敏一

目次

9 ―― 不思議な物語――下

11 ―― 第四十五章
31 ―― 第四十六章
42 ―― 第四十七章
44 ―― 第四十八章
50 ―― 第四十九章
54 ―― 第五十章
58 ―― 第五十一章
64 ―― 第五十二章
69 ―― 第五十三章
76 ―― 第五十四章
79 ―― 第五十五章
97 ―― 第五十六章
101 ―― 第五十七章
113 ―― 第五十八章

115——第五十九章
121——第六十章
123——第六十一章
133——第六十二章
136——第六十三章
140——第六十四章
143——第六十五章
154——第六十六章
157——第六十七章
170——第六十八章
173——第六十九章
176——第七十章
182——第七十一章
214——第七十二章
222——第七十三章
249——第七十四章
273——第七十五章
289——第七十六章
306——第七十七章
310——第七十八章

315——第七十九章
328——第八十章
333——第八十一章
337——第八十二章
344——第八十三章
346——第八十四章
347——第八十五章
350——第八十六章
356——第八十七章
364——第八十八章
370——第八十九章

379——幽霊屋敷と幽霊

423——ブルワ＝リットンについて——中西敏一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

不思議な物語——下

第四十五章

フェイバー氏の側の説明は、短い、簡単なものであった。氏が自分の財産の相続人に予定した甥は、与えられた十分な手当をはるかに越える濫費生活を送り、多額の負債を作った。そして、その借金の片をつけるため、一か八か投機に賭けた彼は、身の破滅に追い込まれてしまった。フェイバー氏は予定の遺産の四分の三以上を当てて、相続人を入獄ないしは社会的追放の汚辱から救うため、イギリスに戻ってきたのであった。加うるに、その若者は財産のない若い女性と結婚をしていた。叔父である氏は、イギリスに着いて初めて、この結婚の話を聞いたのであった。その浪費家は、西の方の州にある義父の家で、債権者から身を隠していた。氏は彼を探しにそこに行った。彼の妻と知り合ってみると、氏にはその結婚がきわめて好ましいものであることがわかり、いずれ甥は立ち直るであろうという希望を抱いたのであった。事実氏は非常な愛情をこめて、若い妻のことを語った。善良で分別心があり、夫がこれまでの愚かな行為の結果から抜け出すことができるためならば、どのような窮乏生活も辞さないし、またそれを、切に願っている女性であった。「そこで」とフェイバー氏は言った。「この立派な女性と相談をした結果――哀れな甥は後悔の念ですっかり打ちひしがれていまして、周りの者としては、そういう気持の彼がきちんとした生活を送れるようになる道を、考えてやらなくてはいけなかったのです――私の計画は定まりました。私はこの放蕩者を、一切の誘惑の場から遠ざけます。彼には、これまで間違った方面に向けられていた、若さと、力と、十分なエネルギーとがありま

す。私は彼を、旧世界から新世界に連れていきます。オーストラリアときめたのです。私の財産はまだ残っていまして、ここではわずかなものですが、その土地では、資本となってなお余りがあります。分かれて暮らすには十分とは言えないものですから、私たちはいっしょに生活をしなくてはなりません。それに、私には初めての国での若い移住者に何よりも役立つ、力も経験もありませんが、見たところあの哀れな甥は、そこに行けば、これまでよりも賢明になり、また堪え忍んでくれると思うのです。私たちは来週この国を去る予定です」

フェイバー氏の話し振りはとても明るく、私としては同情の言葉も述べようがないほどであった。しかし、長い期間を要した優れた研究に没頭し続けてきたあと、あの年で、文明生活の気楽さと楽しみとを犠牲にして、植民地となったばかりの国の、苦しみ、辛さに堪えていくということを考えると、私は侘しい気持にならざるをえないのであった。私は父として愛し、かつ尊敬している氏に、できる限り謙虚に、またできる限り心を込めて、主として氏のおかげで築くことができた私の財産を、どうか自由に使ってくださいと申し出た——少なくとも氏が自分の国で、氏の年齢に合った、また氏の身分にふさわしい家庭生活を送れるだけのものは、受け取っていただくよう説得したのであった。しかしどのように真剣にお願いをしても、昔同様の慎ましい、そして穏やかな威厳を示されて、氏は私の一切の申し出を断わられたのであった。そして、自分の経験には初めてであり、自分の好みからいって何よりも嬉しい、艱難に堪えるという喜びが存分に味わえる国での家庭生活を、非常な関心をもって待ち焦がれていると力説されたあと、急いで話題を変えられたのであった。

「そして私のその穀潰しにとって幸運なことに、救いの手を差し延べてくれたあっぱれな妻は、どういう女

性だとお考えになりますか。哀れなロイド医師のみなし児たちの世話を――あなたが将来の不安のないようにと、惜しみない努力を払ってくださったみなし児たちの世話を――引き受けてくださった、あの立派な人物のお嬢さんなのです。そして、今父の墓のそばから立ち上がったあの子は、私のかわいい友、私の大事な子羊――ロイド医師の娘エイミーなのです」

このときその子は、老人の姿を認め足を速めながら私たちの中に加わり、氏のかたわらに体をすり寄せると、思いに沈んだ目で私をちらっと見た。愛嬌があり、正直そうで、愛らしい――幾分か物悲しそうで、ふつう子供に見られるよりも幾分か考え深そうであるが、静かで賢そうな、そして言いようのないほど穏やかな幼児の顔であった。やがてその子は老人のそばからそっと離れ、私の手の中にその手を置いた。

「おじさんはパパが亡くなった夜会いに来てくださって、家でみんなが言ってますけど、お兄さんたちや私にとてもよくしてくださった、親切なお方ではありません？　そうですわ、今思い出しましたわ」そう言ってその子はキスを求めるため、清らかな頬を私に差し出したのであった。

私が親切だって！　私がよくしただって！　私が――私が！　ああ！　この子は、あの運命の夜、父が私に浴びせた、怒りに満ちた呪いの言葉の意味を何も知っていないのだ！　考えてみたこともなかったのだ！

私はロイド医師のその孤児に、キスをすることはできなかった。しかしその子の手には、私の涙が落ちていった。その子はその涙を憐れみのしるしとして受け取ると、子供らしい感謝の気持を表わすため、黙って私にキスをした。

「ああ、私の友！」小さな声で私はフェイバー氏に言った。「どうしても話したいことが――二人だけで――二人だけで話したいことがたくさんあります。いっしょに私の家に来てください。少なくともこの町にいら

っしゃる間だけは、私の家の客となってください」

「喜んで」以前よりももっと激しく、また、穏やかではあるが、同時に相手の心を見通す、熟練した医者の持つ狂いのない目で私を見つめながら、フェイバー氏は答えた。

氏は立ち上がって私の腕を取り、少女の耳にひと言囁いた。その子は私たちより先にそこを離れ、門のそばに着くと、もう一度父親の墓を見るため振り返った。家に向かって歩いていくとき、ジュリアス・フェイバー氏はその子について様々なことを語った。兄たちは皆学校の寄宿舎にいること、その子は甥の夫人にとてもなついていること、フェイバー氏自身とは、知り合ってまだ間もないのにもっと親密になっていること、オーストラリアには、その子も連れて移住することにきまったということなどであった。

「いずれその土地で、あの子が私たち以外のどこかの家庭の炉端に祝福をもたらすときが来ましたとき、ある心の広い、しかし名の知れぬあの子の父の友人が授けてくださったお金は、開拓者の妻にとっての相当な持参金となってくれるでしょう」氏はさらに言葉を続けて、その子は大海原を渡る前に父の墓に詣でたいため、L――の町に氏の伴をしたいと願ったということ、「そしてあの子は途中ずっと、まるでこちらのほうが子供ではないかとつい思ってしまうほど、濃やかな世話をやいてくれました。私は、たいしたものではありませんが、まだ私のものになっている二、三の家を処分するためと、主として旧世界を去るに当たって、言うまでもなくこれが最後のでしょうが、あなたへの別れを告げるために、この町に戻ってまいったのです。ですから、今日着きますと、私はエイミーを一人墓地に残しておいて、あなたのお宅を訪問しました。しかしご不在でした。さて私は、私の予想をさえも上回って、かくも早くあなたが名誉を取り戻されましたことに対しまして、お祝いの言葉を述べさせていただかなくてはなりません」ということを、語ったのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.